
つれづれ(9) 依頼文

土堀 友

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つれづれ（9）依頼文

【Nコード】

N3505P

【作者名】

土堀 友

【あらすじ】

夜、パソコンに向かう気力がない。

11月の文芸講座

11月の文学講座は朗読会。藤枝静男の「盆切り」を聴きに行った。

文学に触れると心が穏やかになり、幸せな気分になる。

朗読会の雰囲気はとてもよかった。

しかし、テーマがあまりにもリアルで感想文が書けない。

今年は知人とお別れがあつて、思い出したくないのだ。

文章教室の二回目のテーマは「依頼文」

レポートは書き上がったが、どうも面白くない。

そこで、勝手にストーリーを付けて短編小説風に創作してみた。

今年はこれで書き納め、貧しくも幸せな一年であった。

来年もいい年でありますように。

みすぼろしい男(前書き)

みすばらしい男

その男はテーブルの前に立つと無造作に椅子を引いて腰掛けた。

「食つてもいいですか」

男は腹が空いていると見え、テーブルの上にある私のパンを鷺掴みにすると、うまそうに食い始めた。

「手紙を書いたのですよ」男は一呼吸置いてから喋り出した。

「ほう」

「旦那さん知りたいたいですか、私が何を書いたか」

男は私の名前を知らない、しきりに私を「旦那さん」と呼んだ。

男はテーブルの上に並んだ野菜サラダに目をやると、やはり「食つてもいいですか」と尋ねた。

私は食事の途中であつたが、この男の話に興味があつたので「どうぞ」と言った。

男は痩せこけていて、みすばらしかった。伸びてはいないが、髭の濃い顔立ちで、落ち窪んだ頬の陰影とあいまって、顔はくすんで見えた。パスタを注文してやると、その男はうまそうに食つた。

「手紙は書いたのですが、宛先が分からないのです」

「誰に出すのですか」

「旦那さん、それが解らなくなっちゃって。困つた、とても困りました」

男は神経質そうに顔をしかめた。

「行かなくては、追われているのです。いや、何もしていません。そうです、この手紙は神様に出そうと決めていたのです。でも神様の住所が」

私にはその男の所作が尋常なものとは思えず、どうしたものかと戸惑いながら「そうかね」と相槌を打った。

次の瞬間、

「旦那さん、私は可笑しいですか。人と変わっていますか、正常

ではありませんか」

男は矢継ぎ早に言葉を並びたて、不安そうに私の顔色を窺^{うかが}った。私は心の中を見透かされたようで一瞬たじろいだが「そんなことはない。誰でも分からなくなったり、混乱したりすることはありますよ」と、心の内を隠すように早口で喋った。

男はふらつと立ち上がると「行かなくては」と呟き、店の出口に向かつて歩き出した。途中、一度振り返ってなにか口ごもったが言葉にならない。その足取りは、湖畔の朝靄^{あさぐも}に浮かぶ小舟のように弱々しく揺れていた。私は「もう少し話をして行けば」と話し掛けようとしたが、男の背中が光の中に消えた。

男が立ち去った後、食事を摂る気にもなれず私も帰ることにした。レジで代金の精算をしていると、この店の女主人が私を呼び止めた。

「トモさん、忘れものよ」

見ると、あの男が忘れたのだろう、食べ散らかした皿の間に茶封筒が転がっていた。

「それは困るよ、ここで預かる訳にはいかないよ。そうだ、トモさん預かっておくれよ。連絡があったらすぐ知らせるからさ」

女主人は、「面倒はご免だ」と言わんばかりにその封筒を私に押しつけた。私のアパートはこのレストランの筋向いにある。私は断ることも出来ずに、その封筒を預かった。女主人は後ろめたさを感じたのか「熱いがあるよ、持っていくかね」と声を掛け、餃子の入ったパックを二つ包んでくれた。そして「お願いね」と念を押し、愛嬌のある笑顔を振りまいた。

高齢者の虐待

手紙を預かってから二週間が経った。

初冬の空気はどんよりとして重苦しい。

朝寝坊した日曜日、マフラーを首に巻き付け、少しはましな格好をしていつものレストランに向かった。

テーブルに着きモーニングサービスを注文する。次に、脇に折り畳みである新聞を広げる。サラサラと目を通すうちに、小さな記事に目が止まった。「五十代の男が母親に暴力を振るった。介護疲れが原因か。逮捕、拘留されたが拳動不審なところがあり、脳病院に入院した」という記事である。

高齢者の虐待は、調査を開始してから最悪の状態になった。

虐待の種類は殴る蹴るなどの身体的虐待が最多となっており、加害者の内訳では息子が最多となっている。

そして、被害者の多くが加害者と同居しており、介護保険施設に入居を希望しても空きが無いのが現状で、高齢者の多くが順番を待っている。

息子は都会に出て就職したが、四十代でリストラに遭い会社を辞めた。その後再就職を模索するも希望どおりに行かず、故郷に帰り再び親と同居を始めた。そこでは定職に就けず、止むを得ずフリーターとして働いた。

やがて父が亡くなり、母が受け取る遺族年金が家計を支えるようになった。母も高齢になり、介護せざるを得なくなった息子が、誰にも相談できずにストレスが溜まった挙句、おもわず暴力をふるってしまったという。

これが犯罪であると非難されるには、あまりにも気の毒だ。むしろ社会整備の遅れを糾弾すべきではなかるうか。

息子は暗い留置場で「大切な手紙をどこかへ置き忘れてきた。困った、とても困った」と泣いて訴えたという。

私はこの記事を読み驚愕した。突き動かされるように飛んで家に帰り、例の手紙を握りしめて車に飛び乗った。病院までは四時間の距離であるが、道に迷い到着した時には辺りは暗くなっていた。

係官は親切に対応してくれた。

「その人は退院しましたよ。もちろん、検査しましたがね。正常でした」

「母親から被害届も出ていませんしね。深夜大声が聞こえたという付近の住民通報だけではね」、これ以上拘留は無理でしょう」

「手紙ですか？ そんな話はありませんでしたよ、全く」

私はこれ以上留まる事も出来ないので謝して車に戻った。アパートに帰った私は、読み直してみようと新聞を取り出し、例の記事を読んできたが手紙のこと等どこにも載っていないかった。

あの日、レストランで私の昼食をペロリとたいらげたあの男の消息は、杳よゆうとして知れない。

私は悪い事とは知りつつもつい、封筒を覗いて中の手紙を取り出してしまった。

あなた

拝啓

北風を避け、庭先の陽だまりで温もりを味わっています。

今年も早やこの様な季節になったのかと、移り行く時の流れに感じ入る今日この頃です。

ご無沙汰しておりますが元気にお過ごしのことと存じます。

先日老人ホームで暮らしている母を見舞ってきました、母は元気です。

母はよく昔の話をします、先日は子育ての話でした。

私は母の愛を一身に受けて成長したと思っておりました。私の心は「母と私」つまり、一対一の関係です。そのように信じて生きてきました。しかし、この私の考えは、あまりにも身勝手に独りよがりな考えであったことに気付きました。

母は私達兄弟を産み育ててくれたのです。彼女の心は「私と子供たち」つまり、一対多の関係です。母の話を聞くと、子供たちに満遍なく愛を注いだことがよく分ります。私は忙しく生き、母とゆつくり話すこともありませんでした。母の人生は私達子供を育てることが全てだったのでしようか、母は「一人で暮らすことは寂しいものだ」と申します。私があいに行くと、とても喜んでくれますが、帰る時は「また、一人ね」と、瞳を床に落とします。十分お世話できないことに心苦しさを感じますが、できる範囲で精一杯努力しているつもりです。足りない部分は人様の協力をお願いしております。この老人ホームでの暮らしは安定しており、私は感謝しております。そして、母の日々の暮らしがより充実したものであることを願っています。

週2回母を見舞っていますが、会いに行くたびに小さくなっていく母をみると無性に切なく感じます。私は少しでも母の気が晴れればと思い、努めて話を聞くことにしています。このように母と触れ

合うことができ、幸せなことだと感じています。と申しますのも、父が亡くなった時「もう少し永く父と触れ合っておけばよかった」と、自責の念を感じた経験があるからです。母の話は私の知らなかった世界を再現してくれます。「お母さんの人生は幸せだったですか」と尋ねると、「え、まー、そうね。どうだろうね」と申します。その時、母は少し恥ずかしそうに笑いました。今までこれ程までに間近で、しげしげと母の顔を見たことも無い私は、こんな事にも気が付きませんでした。母の笑顔には深い皺しわが刻まれていました。

「よく来てくれたね、あんたは末男かね。困ったね、近頃では子供の名前も忘れちゃうよ」

母を見舞う時間は限られておりますが、短い時間を惜しむように母は私に話し掛けてきます。二人して語り合うこのひとときが、とても充実した幸せなものに感じて、このひとときがとても大切に思えます。

私はこの様な毎日が、いつまでも続く事を祈っています。

最近母は「K子さんはどうしているかねー。実家にも何十年と帰ったこともないねー」と申すようになりました。よろしかったらお便りなどいただけると母も喜ぶかと思えます。母達が幼かったころ、祖父と西の山へクリ拾いに行ったことや、縁側で叔母様と遊んだ時のことなど、よく話してくれます。そのようなことなど話題にしていただければ、きつと母も昔を偲んで喜んでくれることと思えます。まずは、近況報告かたがたよろしくお願い申し上げます。

これから寒くなりますが、叔母様におかれましてもご自愛のほどお祈り申し上げます。

敬具

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3505p/>

つれづれ(9) 依頼文

2010年12月11日10時24分発行